

# 体育専攻生のための英語教育 (ESP) をめざして

— 1, 2 年生のニーズ調査から —

## A Needs Analysis of Physical Education English Students

橋口美紀・坂本育生\*  
HASHIGUCHI Miki・SAKAMOTO Ikuo

キーワード：体育専攻、ESP、ニーズ分析、英語が使える日本人

### はじめに

国立唯一の4年生体育大学である鹿屋体育大学(以下、体大)に在籍する学部1, 2年生を対象に2002年度「体育大学における英語教育」に関するアンケートを実施した。体育・スポーツおよび武道を専攻する学生たちが、大学で英語とどのような関わりがあるのか、また専門教育で必要とされる英語力についてどのように考えているのかを明らかにし、今後の体大における英語教育改善の手がかりとしたい。

従来行われてきたEGP (English for General Purposes: 一般的な目的のための英語) 教育に対し、ESP (English for Specific Purposes: 特殊な目的のための英語) 教育があるが、その基本的特徴としてDudley-Evans and St. John (1998) は、以下の2つを挙げている。

1. 学習者のニーズ分析に基づいていること。
2. ジャンル(学問的背景や職業などの同質性)が認められること。

ESP教育では、学習者の動機を高め積極的な態度を実現するために、学習内容をより専門的なニーズに合ったものにし、学習者に「役に立つ学習である」という意識を持たせるべきだと考える。また、ESP教材は言語教育のために用意されたのではない authentic な素材を用いるのが基本となっている。

本調査は、体育専攻生の英語に対する現在のニーズを把握しようとしたもので、ESP教育(体育)のための第一歩であり、また体大での英語教

育の現状分析(PSA: Present Situation Analysis)とも言えよう。今後は、体大の卒業生や専門教官を対象に同様のアンケートを実施し、最終的には体育専攻生のための英語教材作成と英語教育の改善を目指している。

### I. ESP研究の背景と本調査の目的

1991年の「大学設置基準の大綱化」により、大学英語教育もその目的論、英語教師の役割など再考せざるを得なくなり、日本でも本格的なESP教育を始める大学が出てきたと言われる。特に、医学、工学、法学などの分野でいくつかの大学のESPクラス実践が報告されている。さらに、昨年2002年度には文部科学省から「英語が使える日本人」育成のための行動計画(案)も示された。その目標に、「大学を卒業したら仕事で英語が使える」とあり、「各大学が、仕事で英語が使える人材を育成する観点から、達成目標を設定」と述べている。また、「基礎的・実践的なコミュニケーション能力を身につけるようにすると同時に、職業や研究などの仕事上英語を必要とする者には、。。。。、それぞれの分野に応じて必要な英語力を身に付けるようにし、。。。。」ともある。職業や研究それぞれの分野に応じて必要な英語力を養成するのは、まさにESP教育が目指すところと合致する。

本調査は、分野としてはまだあまり研究されていない体育学でESP教育を実践すべく、体育専攻学生のニーズ分析を行なったもので、次の3つを解明することを目的とする。

1. 体育学部1, 2年生の英語との関わりは、どの程度あるのか。

\* 鹿屋体育大学外国語教育センター  
鹿児島大学教育学部英語教育

2. 現在、体育学部1, 2年生が必要とする英語力はどんなものか。
3. 専門(体育)教育を受ける上で、学生はどんな英語力を必要としているか。

および武道課程に在籍する一年生54名、二年生34名の計88名で、一年生は3学期に「英語Ⅰ」を、二年生は1学期に「英語Ⅱ」を履修した学生である。「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」は、英語の選択必修科目(卒業までに4単位以上修得)で、筆者が担当するクラスで調査を行なった。被験者の詳しい内容は表1～3の通りである。

## Ⅱ. 調査方法

被験者は、鹿屋体育大学の体育・スポーツ課程

表1：被験者の性別・年齢・課程

		1年生 (54名)	2年生 (34名)
性別	男子	39名	29名
	女子	15名	5名
年齢	18歳	7名	0名
	19歳	33名	21名
	20歳	8名	11名
	21歳	2名	0名
	22歳	4名	2名
課程	体育・スポーツ	44名	24名
	武道	10名	9名 1名 (未回答)

表2：被験者の所属クラブ

ク ラ ブ	1年生 (54名)	2年生 (34名)
サ ッ カ ー	11名	5名
ラ グ ビ ー	0名	4名
男 子 バ レ ー	2名	3名
女 子 バ レ ー	1名	2名
ヨ ッ ト	2名	3名
水 泳	4名	2名
陸 上	7名	1名
テ ニ ス	5名	1名
バスケットボール	5名	0名
自 転 車	3名	0名
ウインドサーフィン	0名	1名
セパタクロー	1名	0名
剣 道	3名	0名
柔 道	6名	9名
所 属 無 し	4名	3名

表3：被験者の海外経験の有無

	1年生 (54名)	2年生 (34名)
経験有り	11名 (20%)	12名 (35%)
経験無し	42名 (77%)	21名 (61%)
未解答	1名	1名
滞 在 国	米国、英国、オーストラリア、韓国、カナダ、中国、サイパン、イタリア、アイルランド	カナダ、ドイツ、フランス、オーストラリア、ニュージーランド、中国、韓国、タイ、ブラジル、アルゼンチン

海外経験については、1年生が2割、2年生になると3割を超える学生がすでに体験している。その目的は、ほとんどが遠征試合、強化合宿、スポーツ交流、国際スポーツ大会あるいは競技力向上を目的にした短期留学等で、一般的なホームステイは若干名であった。また滞在期間は、1週間から10日が多く、長いもので3週間から1ヶ月であった。

調査は授業中、学生にアンケート用紙に記入し

てもらい、集めたデータ処理は筆者が手作業で行なった。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 3-1. 英語との関わり

学生が日常どこで英語との関わりを持っているのか、関りの深い順に3つ選んでもらった結果が表4-1、4-2である。

表4-1：英語との関わり（1年生）

	1st	2nd	3rd	計
授 業 等	52名	2名	0名	54名 (100%)
日常生活	0名	6名	5名	11名 (20%)
趣味・娯楽	1名	10名	6名	17名 (31%)
英語学校	0名	0名	1名	1名 (1%)
海外旅行	0名	2名	7名	9名 (16%)
ク ラ ブ	0名	6名	2名	8名 (15%)
ほとんど無	0名	13名	7名	20名 (37%)
そ の 他	バイト 1名	0名	0名	1名 (1%)

表4-2：英語との関わり（2年生）

	1st	2nd	3rd	計
授 業 等	30名	3名	0名	33名 (97%)
日常生活	0名	6名	3名	9名 (26%)
趣味・娯楽	1名	7名	6名	14名 (41%)
英語学校	0名	0名	0名	0名 (0%)
海外旅行	0名	1名	3名	4名 (12%)
ク ラ ブ	0名	2名	2名	4名 (12%)
ほとんど無	3名	5名	13名	21名 (62%)

体大生の英語との関りは1、2年生でほぼ同じような結果となった。つまり、一番関りがあったのが授業等で、1年生で第1位に挙げた学生が96%、2年生で88%であった。1年生では第2位に「ほとんど無し」が、2年生で「趣味・娯楽」がくる。2年生で「趣味・娯楽」が登場するのは、1年次の情報関連科目でコンピューターの操作に慣れ、2年次でインターネットを駆使する学

生が増えることに起因するかもしれない。全体的には、ほとんど英語と関りの無い学生が大半で、1年生で4割弱、2年生で6割にも及んでいる。

### 3-2. 必要な英語力

現在、学生がどのような英語力を必要と感じているか、必要性の高いものから順に3つ選んでもらった結果が表5-1、5-2である。

表5-1：必要な英語力（1年生）

	1st	2nd	3rd	計
読む	10名	2名	4名	16名
書く	3名	6名	10名	19名
聞く	12名	21名	6名	39名
話す	22名	15名	6名	43名
文法	1名	2名	2名	5名
語彙力	0名	3名	7名	10名
発音	0名	1名	11名	12名
英和翻訳	0名	3名	3名	6名
和英翻訳	0名	1名	3名	4名
通訳	1名	0名	0名	1名
その他	0名	0名	0名	0名

表5-2：必要な英語力（2年生）

	1st	2nd	3rd	計
読む	9名	1名	11名	21名
書く	0名	5名	3名	8名
聞く	6名	14名	5名	25名
話す	14名	7名	7名	28名
文法	2名	0名	0名	2名
語彙力	0名	1名	0名	1名
発音	0名	2名	1名	3名
英文翻訳	0名	1名	1名	2名
和英翻訳	0名	0名	2名	3名
通訳	0名	0名	0名	0名
その他	全部 1名 興味なし 1名	0名	全部 1名	3名

1, 2年両学年とも第1位に「話す」(1年: 41%、2年: 41%)が、第2位に「聞く」(1年: 39%、2年: 41%)が必要と答えている。第3位は、1年生が「発音」(20%)、2年生が「読む」(32%)と異なっている。1年生の「読む」必要性は、第1位から第3位まで合わせて3割弱だったのが、2年生では合わせて6割を超える。1年生が「話す」「聞く」「発音」とオーラル面での英語力を必要とするのに対し、2年生はオーラ

ル面だけでなく「読む」力の必要性を感じる事がうかがえる。専門が何であれ情報収集に「読む」力は欠かせないので、これは英語学習には望ましい結果と言えよう。

### 3-3. 英語授業以外での英語の要求度

英語以外の授業やゼミ・クラブなどでどのくらい英語を要求されるか、5段階で答えてもらったものが表6-1, 6-2である。

表6-1: 授業以外での英語の要求度 (1年生)

	1 (全く無し)	2	3	4	5 (いつも)
読む	30名 (55%)	13名	10名	0名	1名
書く	33名 (61%)	10名	9名	1名	1名
聞く	33名 (61%)	10名	12名	1名	2名
話す	34名 (62%)	8名	9名	0名	0名

表6-2: 授業以外での英語の要求度 (2年生)

	1 (全く無し)	2	3	4	5 (いつも)
読む	18名 (52%)	10名	4名	2名	0名
書く	16名 (47%)	10名	6名	2名	0名
聞く	15名 (44%)	9名	8名	2名	0名
話す	21名 (61%)	7名	4名	2名	0名

ここで明白なのは、1, 2年で英語の4技能が、英語以外の授業やゼミ・クラブ等でほとんど要求されないという実情である。1年生では「読む」(55%)を除き、他の3技能で「全く要求されない」が6割を超える。一方、2年生では「話す」を「全く要求されない」は6割を超えるが、「聞く」「書く」の「全く要求されない」が4割台まで減っている。学生が「話す」英語を必要とする一方で、英語の授業以外では「話す」英語が

最も要求されない現状が見えてくる。問3-1で英語との関りがもっとも深かったのが「授業等」であった結果を考えると、結局この「授業等」というのは「英語の授業」であることも判明する。

3-4. 専門(体育)を受ける上での英語の必要性  
専門を受ける上で英語が必要と思うか尋ねた結果が表7である。

表7

	1年生 (54名)	2年生 (34名)	計 (88名)
1. 必要だ	52名 (96%)	32名 (94%)	84名 (95%)
2. 必要ではない	2名 (4%)	2名 (6%)	4名 (4%)

1年生で96%、2年生で94%が「専門教育を受ける上で英語は必要だ」と考えている。不必要と答えた学生は両学年わずか2名で、興味深いことに両学年とも1名はバレーボール部で、その理由を「英語を使うことがないから」「関係がないと思う」と挙げていた。前問での「英語以外の授業やゼミ・クラブ等で英語はほとんど要求されない」現状から考えると、この結果は一見矛盾するように見えるが、学生は専門教育における英語の必要性を認めながら、専門や英語以外の授業で学

生に英語の必要性を訴える場を提供していない現状が浮かんでこないだろうか。

### 3-5. 専門教育を受ける上で、現在不足している英語力

前問で、「専門教育を受ける上で、英語が必要」と回答した学生に、専門教育を受ける上で、現在どのような英語力が不足しているか最も不足しているものから順に3つ選ばせた結果が表8-1、8-2である

表8-1：現在不足している英語力（1年生）

	1st	2nd	3rd	計
1. 全般的基礎	21名	2名	3名	26名
2. 聞く	13名	15名	7名	35名
3. 話す	10名	18名	15名	43名
4. 読む	2名	3名	5名	10名
5. 書く	1名	3名	2名	6名
6. 文法	0名	2名	4名	6名
7. 発音	1名	3名	8名	12名
8. 語彙	4名	2名	3名	9名
9. 英和翻訳	1名	2名	2名	5名
10. 和英翻訳	0名	3名	0名	3名
11. 通訳	0名	0名	3名	3名
12. このままでよい	0名	0名	0名	0名

表8-2：現在不足している英語力（2年生）

	1st	2nd	3rd	計
1. 全般的基礎	17名	0名	2名	19名
2. 聞く	3名	9名	2名	14名
3. 話す	9名	6名	7名	22名
4. 読む	0名	3名	8名	11名
5. 書く	1名	2名	3名	6名
6. 文法	0名	3名	2名	5名
7. 発音	0名	2名	1名	3名
8. 語彙	1名	1名	0名	2名
9. 英和翻訳	0名	2名	0名	2名
10. 和英翻訳	0名	1名	0名	1名
11. 通訳	0名	0名	2名	2名
12. このままでよい	0名	0名	0名	0名

専門教育を受ける上で、学生が現在最も不足していると思う英語力は「全般的基礎」である。その割合は、実に1年生で四割、2年生で五割にも及ぶ。第2位は1年生で「話す」(33%)、2年生で「聞く」(26%)で、表5の回答と重なる。つまり、学生は専門でも「話す」「聞く」力が必要と考えていることがわかる。第3位も1年生では「話す」、2年生で「読む」「話す」の順である。第1位から第3位まで見ても、1、2年ともに「話す」力が不足と考える学生が多い。

表5で学生は「話す英語がもっとも必要」と考

えていることが判ったが、必要性が高いからこそ、その不足を感じるとも言えよう。また、1、2年のアンケート回答者で「このままでよい」は皆無で、専門教育を受ける上で皆が英語力の不足を痛感しているようだ。

### 3-6. 体育系で必要とされる英語力

一般的に体育系で必要とされる英語力について、必要性の高い順に順位を記入させたのが、表9-1、9-2である

表9-1：体育系で必要とされる英語力（1年生）

	1	2	3	4	計
読 解 力	20名	10名	13名	9名	52名
論文等作成能力	6名	13名	11名	12名	42名
口答発表能力	15名	11名	16名	7名	49名
講義・発表等聞き取り力	13名	18名	10名	6名	47名

表9-2：体育系で必要とされる英語力（2年生）

	1	2	3	4	計
読 解 力	11名	8名	9名	3名	31名
論文等作成能力	4名	2名	11名	7名	24名
口答発表能力	12名	12名	4名	5名	33名
講義・発表等聞き取り力	6名	10名	5名	8名	29名

1年生は、体育系で必要とされる英語力について第1位に読解力、第2位に講義・発表等聞き取り力、第3位に口答発表能力を挙げた学生が多い。一方、2年生は、第1位、2位とも口答発表能力を挙げた学生が多く、第3位に論文作成能力を上げている。2年生の第1位は、口答発表能力と読解力が僅差なので、1、2年とも体育系では「読解力」が最も必要と考える学生が多いと言えよう。読解力の次に、発表および聞き取り能力が体育系では必要と考えているようだ。

## IV. 結 論

本調査で明らかになったのは、以下の3点である。

1. 体育学部1、2年生の英語との関りについては、英語の授業で一番関りがあった。全体的には、ほとんど英語と関りの無い学生が大半で、1年生で4割弱、2年生で6割にも及んだ。
2. 体育学部1、2年生が現在必要とする英語力については、両学年とも第1位に「話す」が、第2に「聞く」であった。1年生が「話す」「聞く」「発音」とオーラル面での英語力を必要とするのに対し、2年生はオーラル面だけで

なく「読む」力の必要性を感じている。

3. 専門(体育)教育を受ける上で、学生が必要とする英語力については、1, 2年生とも「読解力」が最も必要と考える学生が多かった。また、専門教育を受ける上で学生が現在最も不足していると思うのは「全般的基礎」であった。

この調査結果から、体大体育学部1, 2年生の英語学習者像が見えてくる。すなわち、英語の授業以外ではほとんど英語と関りが無く、また現在「全般的基礎」が最も不足している。必要とする英語力は、1年生で「話す」「聞く」、2年生でそれに「読む」力が加わる。専門の体育教育を受ける上では、「読解力」が最も必要と考えているようだ。

本調査は、学部1, 2年生のみを対象にし、まだ3, 4年生および院生を対象に調査を実施していないため、この結果だけでは全体的な事は何も言えない。学生の「全般的基礎」の不足については、2001年度から新入生会員にG-TELP 4級を受験させ、レベル分け後「英語基礎」の授業を行なっているので、今後もう少し対処できよう。しかし、英語の授業以外では学生がほとんど英語と関りが無い上に、英語の4技能全てが英語以外の授業やゼミ・クラブ等でほとんど要求されないという現状は、直視すべきであろう。学生に英語が専門的にも「役に立つ」という意識を持たせるためには、多少なりとも英語以外の授業、専門科目およびゼミ・クラブなど英語力を要求するような環境を整えていくことが今後必要と思われる。体育専攻の学生は、遠征・交流試合・国際スポーツ大会等と海外経験も豊富で、専門でも「話す」「聞く」の力が必要と考えていることから、これを何とか英語教育に結び付けて指導できないだろうか。また、1, 2年生は専門教育を受ける上で「読解力」の必要性を感じているので、英語教師と他の専門(体育)教育の教師が共同で教材を開発するなど、「体育専攻生のための英語教育」の枠組みを構築し、早急に改善していく必要性を感じている。

## 参考文献

- Douglas, D. (2000). *Assessing Languages for Specific Purposes*. Cambridge. Cambridge University Press.
- Dudley-Evans, T. and St. John, N. J. (1998). *Developments in English for Specific Purposes*. Cambridge. Cambridge University Press.
- 深山晶子編集(2000). *ESPの理論と実践*. 東京. 三修社
- Hutchinson, T. and Waters, A. (1987). *English for Specific Purposes: A Learning-Centred Approach*. Cambridge. Cambridge University Press.
- 文部科学省(2003). 「英語が使える日本人」の育成のための行動計画案. 文部科学省主催「英語が使える日本人」の育成のためのフォーラム資料
- Robinson, P. (1980). *English for Specific Purposes*. Oxford. Pergamon Press.
- Swales, J. M. (1990). *Genre Analysis: English in Academic and Research Setting*. Cambridge. Cambridge University Press.
- Van Lier, L. (1996). *Interaction in the Language Curriculum: Awareness, Autonomy, and Authenticity*. London. Longman.